
 シンポジウム

「小児医療の現状と課題」

Medical Care and its Problems of Children in the Present Circumstances

第534回新潟医学会

 日 時 平成9年12月13日(土)午後3時10分～5時10分
 会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

司 会 岩淵 真(小児外科)

演 者 佐藤雅久(新潟市民病院小児科), 浅見恵子(県立がんセンター新潟病院小児科), 許 重治(小児科(NICU室)), 新田初美(はまぐみ小児療育センター小児科), 八木 実(小児外科), 柳本利夫(やぎもと小児科), 田中 篤(小児科), 塚田次郎(塚田こども病院)

発言者 小田良彦(新潟市民病院), 長島忠昭(新潟発達療育センター), 内海治郎(新潟赤十字血液センター), 柴田史郎(柴田小児科), 渡辺 渡(新潟県立妙高高原小児科)

司会 これからシンポジウム「小児科医療の現状と課題」を始めます。8人の先生方に発表して頂いてから、まとめてディスカッションをしたいと思います。では佐藤先生よろしくお願い致します。

1) 小児救急医療の現状と問題点

 新潟市民病院 小児科 佐藤 雅久・阿部 裕樹
 山崎 明

 The Present Situation and Problems in Pediatric Emergency Medical Care
 Masahisa SATOH, Yuhki ABE and Akira YAMAZAKI

 Niigata City General Hospital,
 Department of Pediatrics

We investigated the number of pediatric patients who underwent medical examination in our hospital emergency room, between January 1992 and December 1996, together with the type and severity of their diseases and prognosis. We examined 11,275 patients during this period, accounting for 22.9% of all our hospital emergency

 Reprint requests to: Yuhki ABE,
 Department of Pediatrics, Niigata City
 General Hospital, 2-6-1 Shitikuyama,
 Niigata City 950-0914, Japan

 別刷請求先: 〒950-0914 新潟市紫竹山2-6-1
 新潟市民病院小児科 佐藤 雅久

patients. Of these, 1,807 patients were admitted as emergency cases, accounting for 9.6% of all pediatric patients. The emergency patients ranged in age from 0 years to 24 years and 2 months. The average age was 4 years and 7 months, and the median was 3 years and 8 months. The majority of the patients were aged between 0 and 2 years, accounting for 43.1%, followed by those aged between 3 and 5 years, accounting for 26.8%. Among the various diseases, bronchial asthma accounted for the largest proportion of patients, followed by mild upper airway disease. With ranged to disease severity, a large majority of cases were mild.

Key words: pediatric emergency medical care
小児救急医療

はじめに

少子化が進み、子供の数は減少し続けているが、気管支喘息の増加など、子供の病気そのものは減少していない。また、親の病気に対する考えの変化、開業医の意識の変化などにより夜間の救急医療の需要は益々高くなっている。今回我々は、当科における救急医療の現状を報告し、その問題点を示した。

方 法

1992年1月から1996年12月までの5年間の当直日誌における記載より、受診者数、性、受診日、年齢、疾患名、重症度、転帰などを調査し検討した。

結 果

調査期間の5年間に当院救急外来を受診した小児科患者は、延べ11275名であった。これは同時期に当院救急外来を受診した延べ49212名の22.9%に当たる。男児6822名、女児4453名であった。年齢は、0ヶ月より24歳2ヶ月を幅広く分布していたが、平均は4歳7ヶ月、中央値は3歳8ヶ月と幼児が多く認められた。受診者のうち、入院加療を必要とした者は1805名、9.6%であった。うち、1110名は、救命救急センターへの入院であった。年次別の外来受診者とその入院者数を表に示した。1992年には2357名であった受診者が、1993年4月より、新潟市医師会急患センターで平日の準夜帯の診療が始まったため、1993年には2161名に一時的に減少したが翌1994年から再び増加傾向になっている。しかし、入院者数に減少傾向は見られず、むしろ徐々に増加している。これは、当科が2次輪番病院を多く引き受けている事や、喘息患者の増加など、小児人口の減少にも関わらず病気が減少していないことを示していると考えられた。1996

年9月には、急患センターで平日と休日の深夜の診療も始まり、外来患者数は再び減少している。

月別の受診者数は、4月、5月、9月、10月の気管支喘息患者の増加する月と、下痢・嘔吐患者の増加する12月、1月が多かった。

曜日別の受診者数は、平日では当科が2次輪番病院である月曜日に多くなっている。また、当院の休診日である土曜と日曜日も2次輪番病院であることが多く、受診者が極端に多かった。受診患者の年齢は、0から2歳代が圧倒的に多く、4865名、43.1%を占めていた。3歳から5歳代は3018名26.8%であり、年齢が上昇するにつれて減少していた。疾患別の受診者数の検討では、気管支喘息の例が圧倒的に多く、1992年803名、1993年811名、1994年645名、1995年748名、1996年707名であった。94年より喘息の受診例が減少しているが、ステロイドの吸入療法など、治療の変化によるものと思われた。

しかし、咽頭炎、上気道炎などの軽症例も各年に240名から500名認められた。脳神経疾患患者では、熱性けいれん、てんかんなど痙攣性疾患で受診する例が多く認められた。

消化器疾患では、大腸炎が多く認められた。

特に冬季には下痢、嘔吐を生じ脱水で受診する例が増加した。その他の疾患では、タバコの誤飲が多く認められた。これは予防可能な疾患であり、家内での喫煙禁止など、社会的教育が必要と思われた。

受診者の重症度分類では、投薬などで済む、1次患者が圧倒的に多く認められた。しかし、観察、治療入院を要する2次患者も約9%に認められた。急患診療センターの充実により1次患者は減少しているが、2次、3次患者は減少していない。このように、我々の夜間診療内容に変化はなく、今後1次患者をより減少させ、2次、3次の患者をより多くあつかえるようにする必要があると

思われた。3次患者は133例で、当科受診者の1.2%であった。月に約2例このような重症例が受診していることになる。その内訳は、気管支喘息と脳炎が多かった。

考 察

新潟市の小児救急医療は、急患診療センターと、当院を含めた8病院による2次輪番からなっている。当院は、新潟市で2次輪番を引き受けている唯一の公的病院であり、規模も大きいため、常に救急医療の中心的役割を担ってきた。我々の役割は、2次、3次患者の診療だと考えているが、受診者の多くは、当科で経過観察中の者を含め1次患者であった。急患診療センターの診療時間拡大によりその数は減少しているが、より一層の充実が望まれる。当科医師の当直は、新生児医療センターの当直があるため、2次輪番の日は2名が当直しており、日直を含めると月4から5回となる。これは院内の他科の医師と比べても約2倍となっている。また、その内容も小児

表

	92年	93年	94年	95年	96年
総受診者数	2357名	2161名	2286名	2362名	2109名
1次患者数	2073名	1842名	1877名	1890名	1697名
入院者数	271名	308名	395名	444名	387名

科病棟、救急救命センターと2つの病棟の診療と、新生児医療センター当直の手伝いも行わなければならない、極めて多忙である。我々は、夜間救急医療の他、新生児医療、高度先進医療、難病医療、重症患者の治療など1人で数役をこなしている。このような少数の勤務医の犠牲に成り立つ救急医療には限界があり、人員の補充も含め、早急な改善が必要と思われた。

2) 小児がん治療の現状と問題点

新潟県立がんセンター新潟病院小児科 浅見 恵子

Current Treatment and Problems in Childhood Cancer

Keiko ASAMI

*Department of Pediatrics
Niigata Cancer Center Hospital*

It has been more than 15 years since megatherapy protocols, based on so called "total cell kill therapy", has been applied to most of advanced, common childhood cancer, including leukemias and solid tumors. Many protocols, using many and high dose cytotoxic drugs, enabled many children to survive. It is now estimated that by the year 2000 one in a thousand 20-year olds will be a survivor of childhood cancer.

However, late effects of chemotherapy, including growth failure, cardiac function, hearing impairment, fertility, lung toxicity, neuropsychological sequelae, and secondary cancer have become serious problems among these survivors. In addition, how to inform

Reprint requests to: Keiko ASAMI,
Department of Pediatrics, Niigata Cancer
Center Hospital, 2-15-3 Kawagishicho,
Niigata, 951-8133 Japan

別刷請求先: 〒951-8133 新潟市川岸町 2-15-3
新潟がんセンター小児科 浅見 恵子